月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.
173



ファルコムニュース

英雄伝説 空の軌跡
&
啄木鳥しんきのFalcom日和

英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を

舞台はボースへ!
アネラスやリシャール大佐の
新ビジュアルが到着!!

『空の軌跡 the 1st』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



空の軌跡 the 1st

ソラノキセキ ザ・ファースト

今号はロレントに続き
ボースから新キャラクタービジュアルが続々到着！
さらに戦術オーブメント&クオーツ情報も！

『軌跡』シリーズの原点『英雄伝説 空の軌跡』の完全フルリメイクとなる『空の軌跡 the 1st』。前号では始まりの街・ロレントからお馴染みのキャラクターたちの新ビジュアルが到着したが、今号はボースに馴染みのあるキャラクターたちが登場。さらに、戦術オーブメントやクオーツ、アーツのビジュアルも到着した！

『空の軌跡 the 1st』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sora/

空の軌跡 the 1st
●発売日：2025年9月19日　**●ジャンル**：ストーリーRPG
●対応機種：Nintendo Switch / PlayStation 5 / Steam
●プレイ人数：1人　**●CEROレーティング**：B
●価格：【ブレイサーBOX（パッケージ）】15,400円（税込）
【通常版（パッケージ／ダウンロード）】8,800円（税込）
【デジタルデラックス版（ダウンロード）】12,100円（税込）
【シーズンパス（ダウンロード）】3,850円（税込）

モルガン将軍

（CV：堂坂晃三）



年齢：45歳

リベール王国軍の国境師団を率いる将軍であり、現王国軍のトップにあたる人物。
頑固でかくしゃくとした老軍人で、とある理由により遊撃士を毛嫌いしている。
既に一線は退いているものの、60歳を越えた現在でも斧槍を軽々と操る豪傑としてその名が知られている。

「フン、そういう姑息な真似をするから遊撃士など信用できんのだ！」







アラン・リシャール大佐

（CV：古川慎）



年齢：34 歳

リベール王国軍きっての若手将校。軍内部に「情報局」を設立し、その初代司令官となった。
かなりの切れ者であり、王国軍の若きホープとして部下や国民からの人気も高い。
民間組織である「遊撃士協会」の存在意義や軍との連携の必要性も熟知しているほか、自らの立場を鼻にかけることもない謙虚な姿勢で人々に接している。

「軍とギルドは協力関係にある。互いに欠けている部分を補い合うべき存在だと思うのだ。」







カノーネ・アマルティア大尉

（CV：近藤玲奈）



年齢：27 歳

王国軍情報部に所属する女性士官で、リシャールの副官。
冷静冷徹に作戦を遂行するタイプで、その切れ者っぷりはリシャールと肩を並べる程。
上官であるリシャールへの忠誠心が高く、徹底的に彼の行動をサポートしている。

「有事に迅速に対応するのが我々、情報部の役目ですから。」







メイベル市長
（CV：大西沙織）



年齢：22 歳

聡明で行動力のある、商業都市ボースの若き女性市長。
先代のボース市長であった父親が亡くなった後、市の政治基盤を受け継いで最年少の市長となった。
七耀教会の祈りをサボるなどだらしない面もあるが、女性らしい気配りと度量の広さを兼ね備えており市民からの信頼は厚い。

「大丈夫、貴方たちだったら立派なボース商人になれますから。」







リラ
（CV：山崎エリイ）



年齢：20 歳

メイベル市長の身のまわりを世話しているメイド。
普段は控えめで冷静沈着だが、時に毅然とした態度をとることも。
愚痴をこぼすこともあるが市長のことは敬愛しているらしく、親身になってメイベルの業務を支えている。

「有能な方には違いありません。少々、破天荒な所はございますが。」







アネラス・エルフィード
（CV：徳井青空）



年齢：18 歳

ボース支部に所属する新米正遊撃士。
大きなリボンが特徴で、“かわいいもの”に目が無い。
祖父は東方に伝わる剣術《八葉一刀流》の開祖ユン・カーファイ。
直弟子にはあたらず、まだまだ成長途中ではあるものの、剣士としての総合的な潜在能力はかなりのもの。

「譲らないよ――あたしが信じる剣の道に懸けて！」







グラッツ
（CV：畠中祐）



「どれほどの腕かこの剣で確かめさせてもらうぜ！」



年齢：22 歳

ボース支部に所属する正遊撃士でアネラスの先輩にあたる。
優男風に見えるが、戦闘では大剣をふるい自ら先陣に切り込んでいく前衛アタッカータイプ。
気さくな性格で面倒見もよく、“優しい遊撃士のお兄さん”として地域住民からも慕われている。







戦術オーブメントやクオーツ 導力魔法（アーツ）のビジュアルも到着！

『軌跡』シリーズといえば、戦術オーブメントと呼ばれる機械に「クオーツ」と呼ばれる結晶回路を組み込むことで、キャラクターの能力を強化したり、様々な導力魔法（アーツ）を使うことができるようにしたりと、カスタマイズ性の高いシステムが特徴のひとつとなっている。今回はそのビジュアルと、一部アーツの場面写真も到着した。

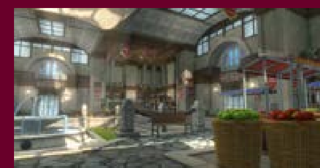






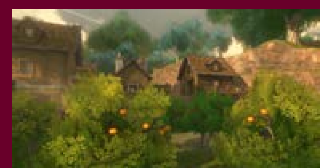

WORLD

◆商業都市ボース◆



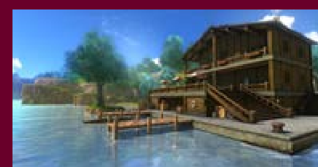
リベール五大都市の中でも王都グランセルに次ぐ規模を誇る商業都市。市中央のボースマーケットは食料品・衣類・雑貨・家具・書籍などあらゆる日用品が並ぶ大型の屋内市場で、観光スポットとしてこのマーケットを訪れる旅行客も多い。

◆ラヴェンヌ村◆



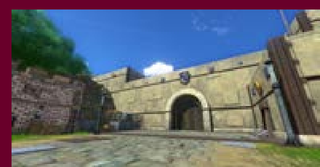
ボース地方西部、険しい山岳地帯に位置するのどかな村。かつては七耀石の採掘で賑わいを見せていたが、現在は果物の産地としてその名が知られるようになっている。

◆ヴァレリア湖畔◆



リベール王国のほぼ中央に位置している巨大な湖畔で、その景観の美しさから「リベールの真珠」と評されている観光スポット。ボース市からアクセス可能な湖畔の宿「川蝉亭」では湖が眼前に広がる開放的な部屋で静かな一時を過ごせるほか、新鮮な魚料理を堪能することもできる。

◆ハーケン門◆



北の大国・エレボニア帝国との国境沿いに位置する堅牢な門で、リベール王国軍・国境師団が守備を担当している。リベールとエレボニア帝国を繋ぐ唯一の門となっているため、出入国審査も厳しく、ここで足止めをくらう旅行者も多いという。

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

《零の軌跡＆創の軌跡 コラボカフェ》開催決定！



『英雄伝説 零の軌跡』15周年と『英雄伝説 創の軌跡』5周年を記念したコラボカフェが、eeoCafe（池袋）で開催。コラボメニューの他、オリジナルグッズの販売が行われます。



コラボカフェメニューのご注文1点につき1枚、コラボカフェセットメニューをご注文で3枚のコースターをランダムでプレゼント！



■店頭販売：2025年7月15日（火）～7月27日（日）
■店舗：eeoCafe（東京都豊島区南池袋1-9-21 JK7 1階）
■主催・発売元：株式会社A3

特設サイト
https://eeo.today/graffartcafe/#eeoitems_kiseki

『イースⅣ～ザドーンオブイース FM Sound Collection』配信！

「イース・メモワール -セルセタの樹海-」のもとになったBGMの原曲集「イースⅣ J.D.K.スペシャル The Dawn of Ys」、「ファルコム・スペシャルBOX'95」に収録された"イースⅣ J.D.K.スペシャルPART2"の楽曲を集め、ボーナストラックとして「パーフェクトコレクション イースⅣ～ザドーンオブイース」シリーズに収録されていたイースⅠ・イースⅡの楽曲を"J.D.K.スペシャル"と同等の音源で再現した8曲を加えた全58トラックのアルバムをデジタル限定で発売。



■配信日：2025年6月21日
■価格：アルバム 1,527円（税込）／単曲 154円（税込）
※定額音楽配信サービスでも楽曲提供中
※ダウンロード版は配信サイトによって価格が異なる場合があります

詳細はこちら　https://www.falcom.co.jp/music-data/ys4-tdoy_fm-sc

『軌跡シリーズ』フィギュア「シズナ」1/8スケール予約受付中！

コトブキヤ×日本ファルコムが贈る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画、「シズナ」の1/8スケールフィギュアの予約を受付中。
『英雄伝説 黎の軌跡』等で着用している強化スーツを纏い、ゲーム内での印象的な構えをモチーフに立体化しました。
あどけなさの残る顔立ちや身の丈近くある漆黒の大太刀『暁鴉（あけがらす）』など、細部まで忠実に再現。
台座にはSクラフト「皇技・零月一閃」をイメージした桃色に舞う花びらをあしらいました。





■メーカー受注締切:2025年7月22日(火)
※以降は上限に達し次第受付終了
■発売日:2025年12月予定
■価格:24,200円(税込)

コトブキヤオンラインショップ
https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054065585/

コトブキヤで「界の軌跡」描き起こしグッズ発売決定！

『英雄伝説 界の軌跡』の新規描き起こしイラストや公式イラストを使用した新商品がコトブキヤで発売されます。





■日程：2025年7月4日（金）～7月21日（月）
■店舗：コトブキヤ（立川本店／秋葉原館／日本橋）、コトブキヤオンラインショップ
■発売元：株式会社A3

特設サイト
https://www.falcom.co.jp/archives/189714

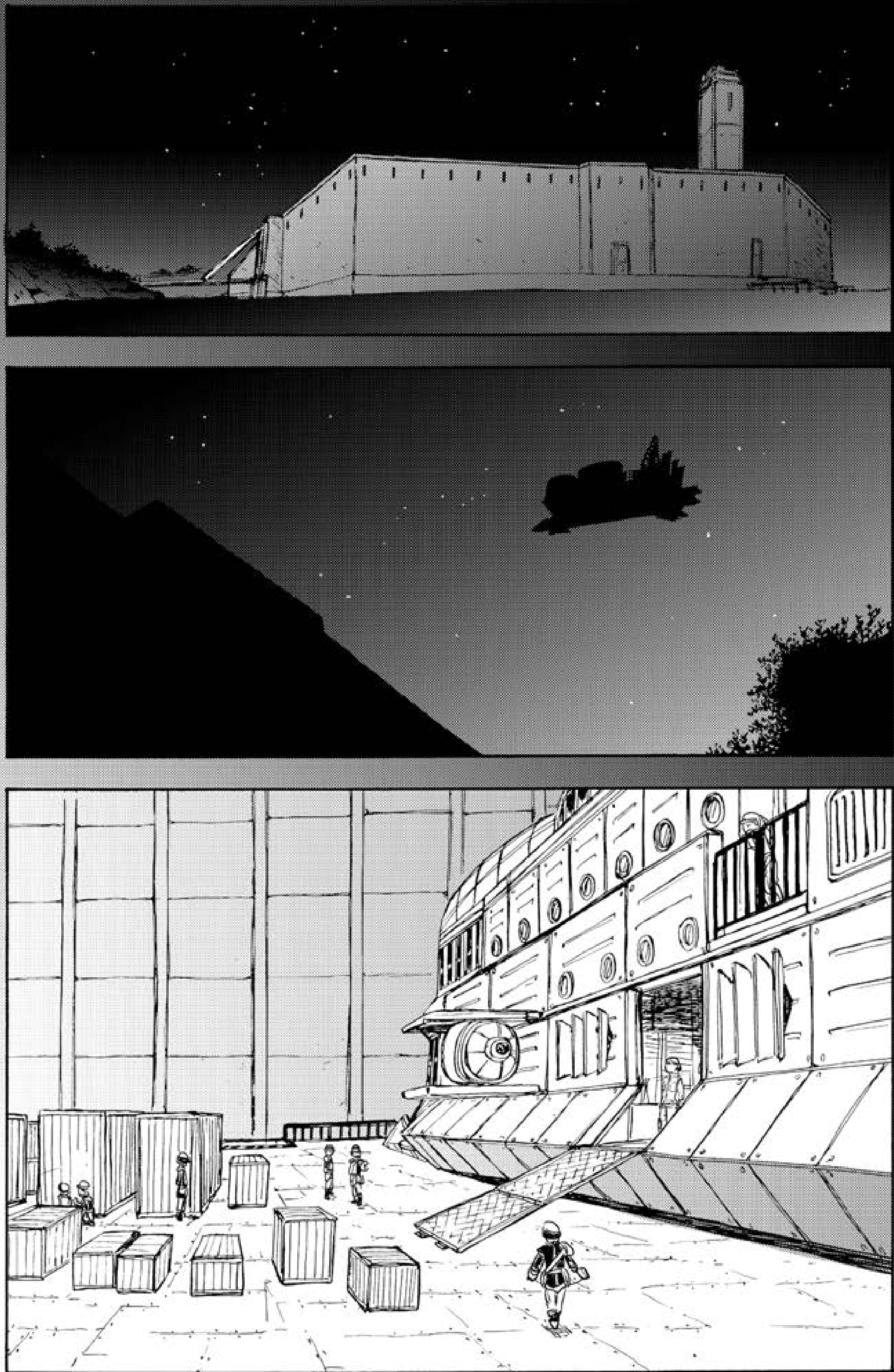
空の軌跡 the 1st ウエハース予約受付中！

バンダイさんより『空の軌跡 the1st』のウエハースが10月に発売決定。物語を彩るキャラクターたちを収録した、全28種のメタリックプラカードがラインナップ！



・ココアクリーム味ウエハース1枚入り
・メタリックプラカード1枚入り（全28種）

商品情報　https://www.bandai.co.jp/candy/products/2025/4570117925627000.html





リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！

リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！

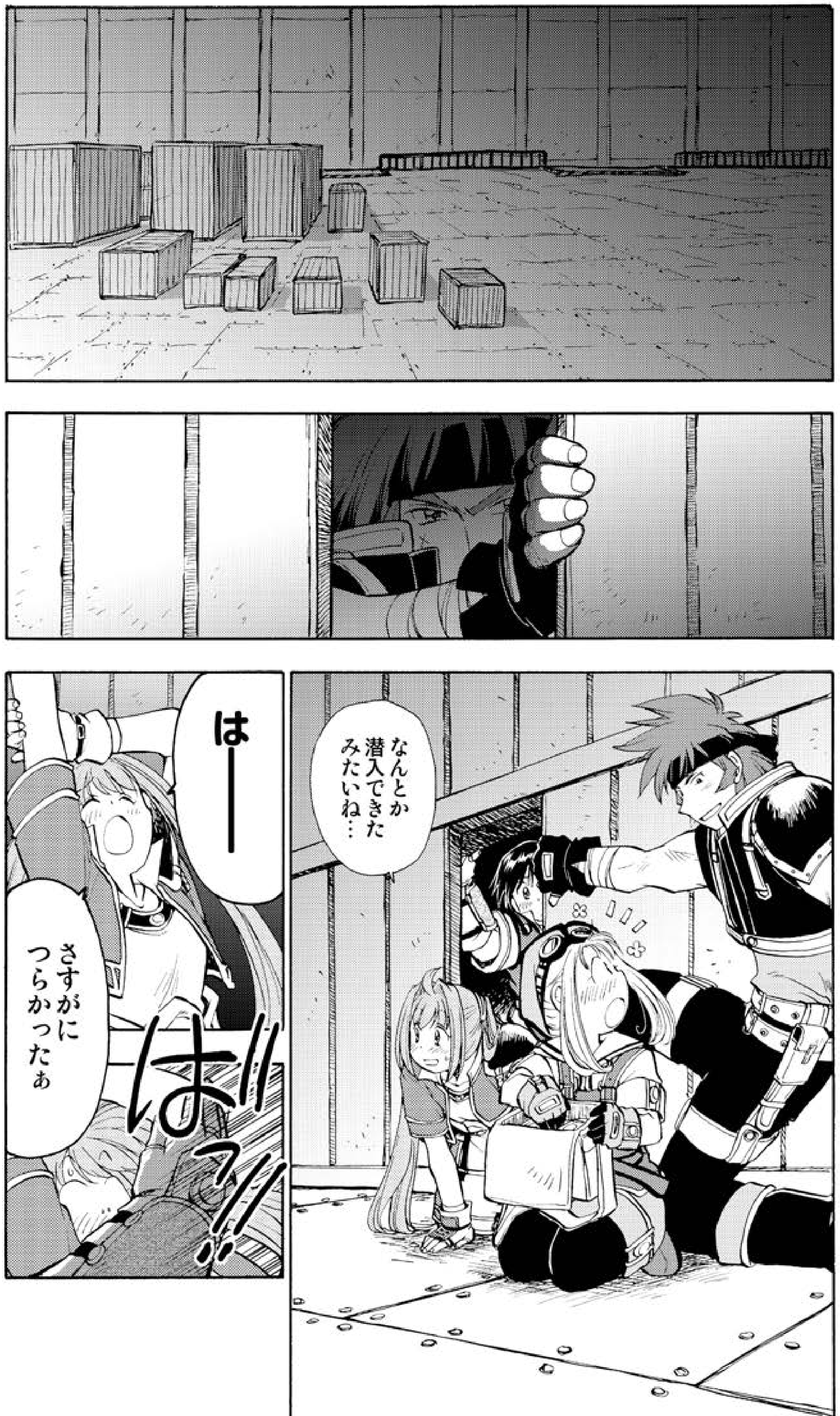
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥

嫁木鳥しんき

定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル


よう
シード少佐!
グスタフ整備長
すまないな…急な発注に応じてもらって
なんのこれしき
軍は工房のお得意様だからな
むしろ軍から注文が入るのを
今か今かと待ち受けてたぐらいだぜ!
しかし…今日はいつにもまして警備が厳しいな…
中庭のは…軍用犬か?
さらわれたラッセル博士の捜索も頼むぜ
あの人は俺の大の恩人なんだからよ
要塞の警備に力を入れるのは結構だがよ…
あ…ああ…
それになあティータ坊が…
ラッセル爺さんのちっちゃな孫娘がな
ひとりぼっちで…見てられなくてよ…


シード少佐！
全コンテナのチェックが終了しました！
検視及び生体反応
共に異常ありません！
搬入は明日にしよう
今日は遅くまでご苦労だった
グスタフ整備長も…色々…すまないな
いや役に立てたならなによりだ
俺にできるのはここまでだからな
あとのことは任せたぜ！

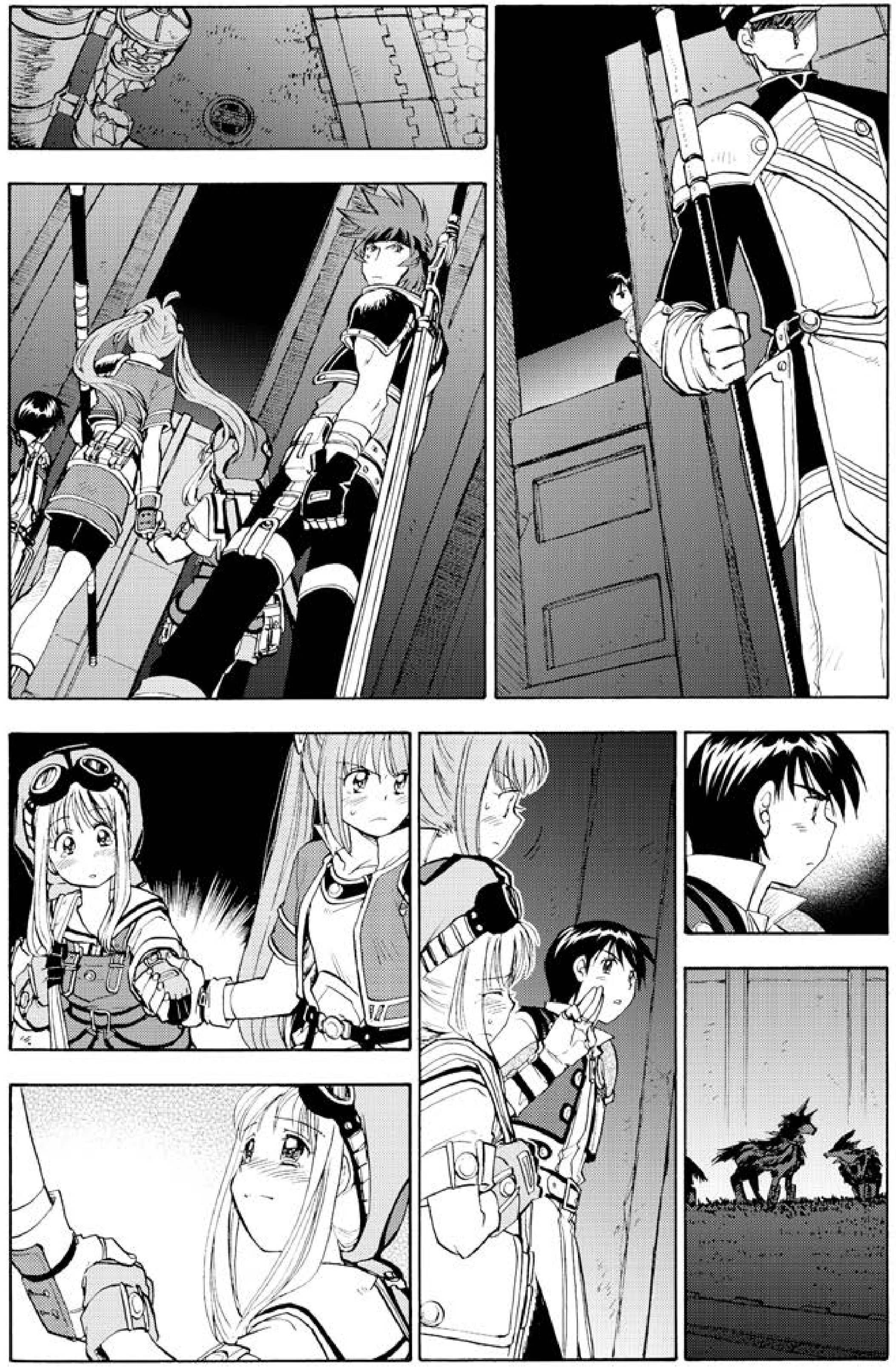

はーーー
さすがにつらかったぁ
なんとか潜入できたみたいね…


見つかったら
終わりなんだ
なななこ?
ヨシ
大きな声
出さない
ここはもう
軍の本拠地だよ
とにかく
まずは
ラッセル博士の
居場所だな
幸い要塞の
地図がある
ここから
いくつか
見当をつけて
中央の
研究棟だと
思います

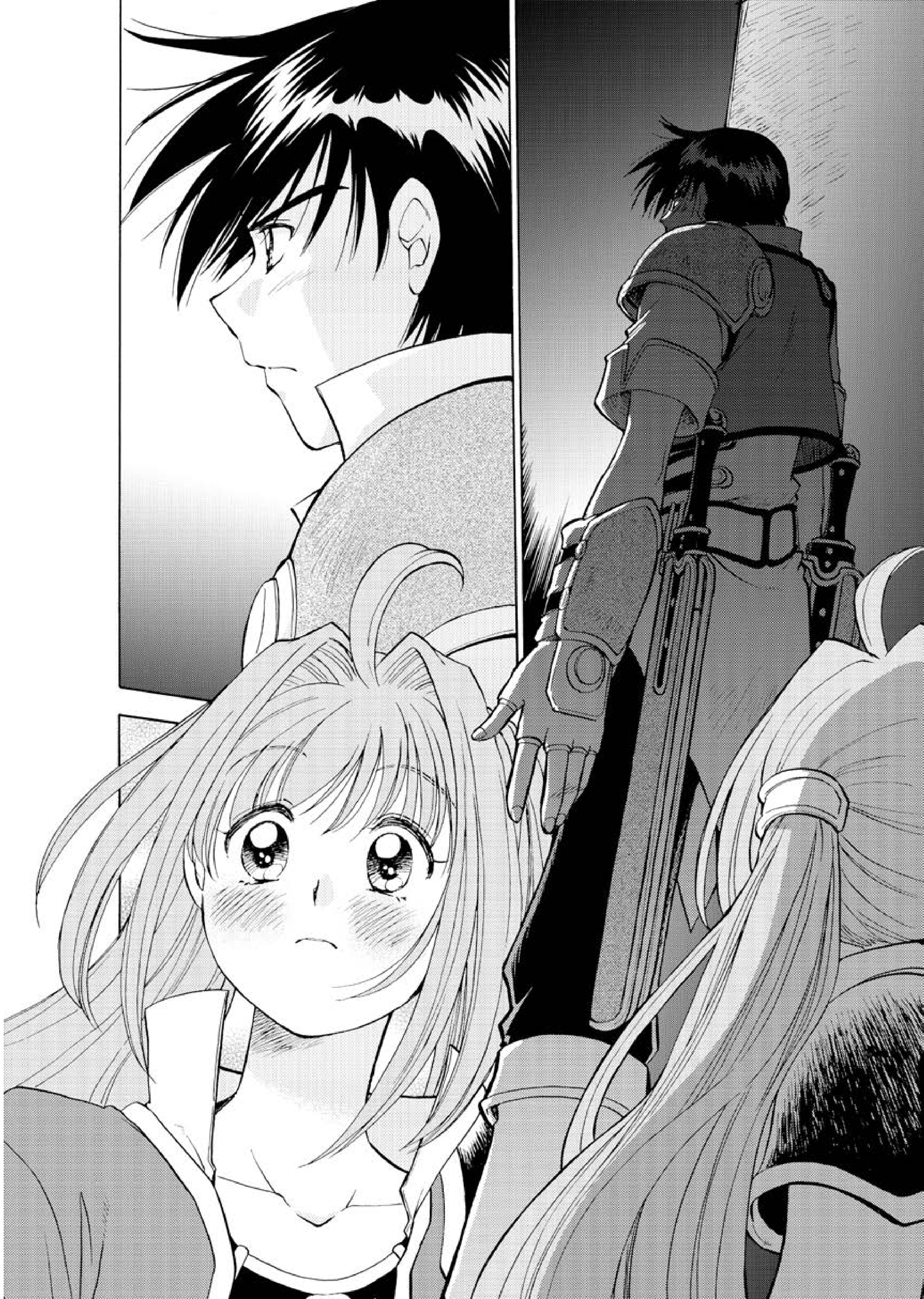

聞こえてきた
兵士達の会話から
要塞内の軍人全てが
博士の存在を認識
しているわけではない
ことが伺えました
今回の事件は
軍全体の総意ではなく
要塞内の一部の犯行と
みていいと思います
それを踏まえると
不特定多数の人間が
出入りするような
兵舎・司令塔などの
施設は候補から
はずせる――
研究棟は
独立した敷地に
あるし
その用途の特殊性から
外部の人間を
遮断しやすい
設備的にも
博士の才能を
利用するのに
うってつけの
場所ですから
なるほどな
じゃあ
まず研究棟に
行ってみるか
そのルート
僕にすべて
任せて
もらえませんか

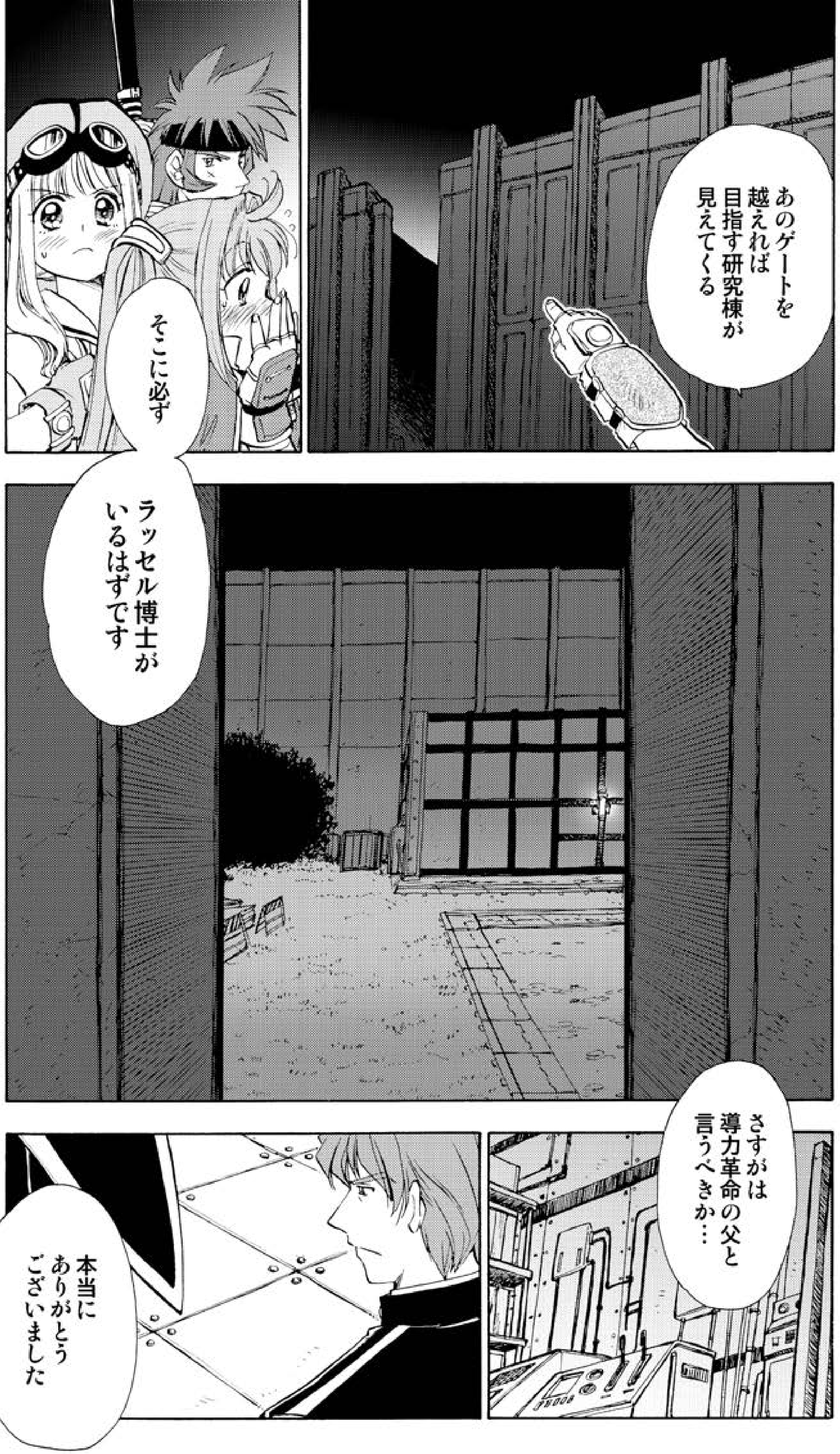


必ず
安全に
博士のもとへ
たどり着いて
みせますから
あ…
わかった
しんがりは
俺が務める
すみません
…じゃあ
僕の指示通りに
ついてきてください
うん…
ヨシュア
これ
レイストン
要塞の…
すっ
大丈夫だよ
エステル
全部
頭に
入ってる
…行くよ!




ヒュッ
タ
タ
タ
コン!
すっ
ザッ

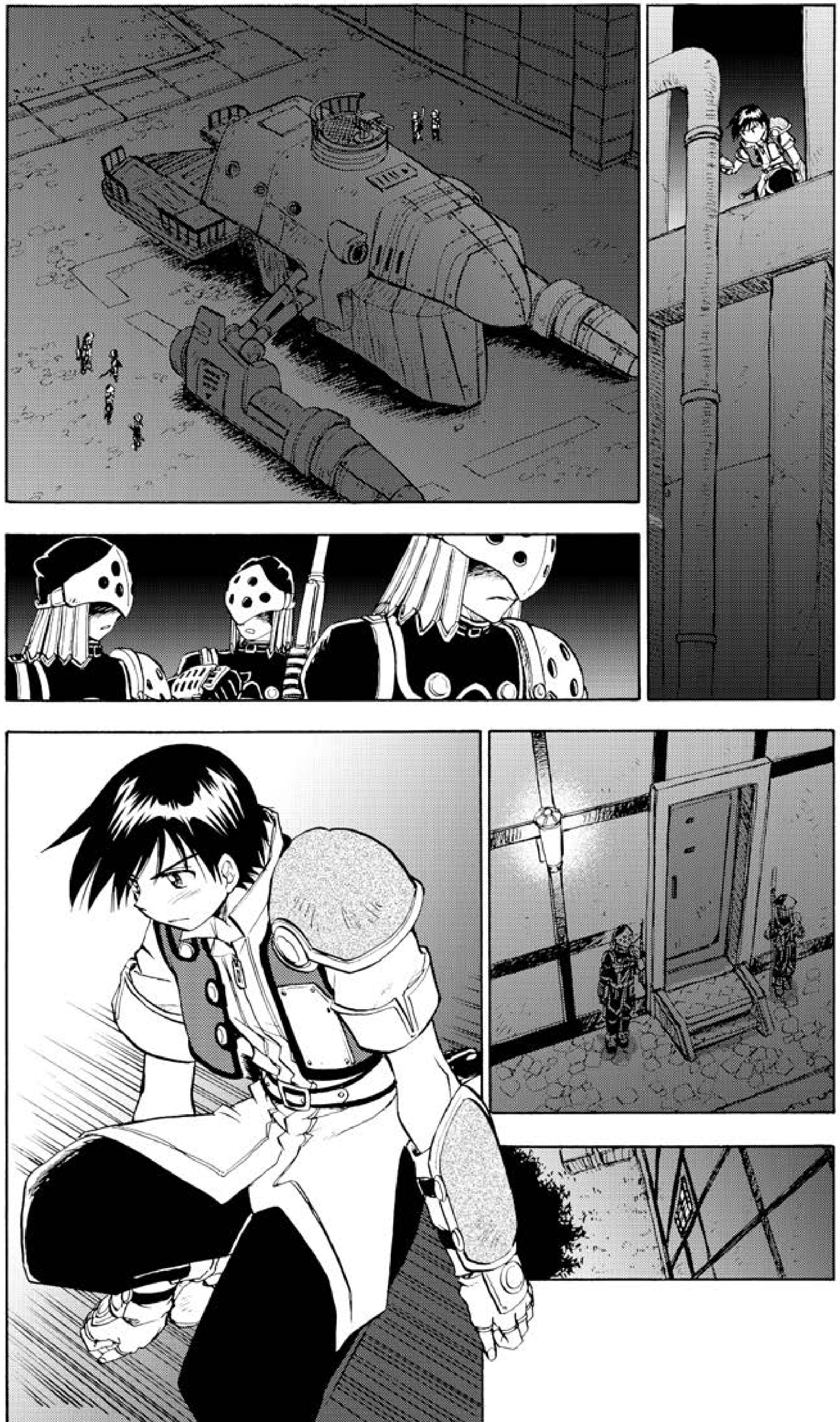




あのゲートを越えれば目指す研究棟が見えてくる
そこに必ず
ラッセル博士がいるはずです
さすがは導力革命の父と言うべきか…
本当にありがとうございました

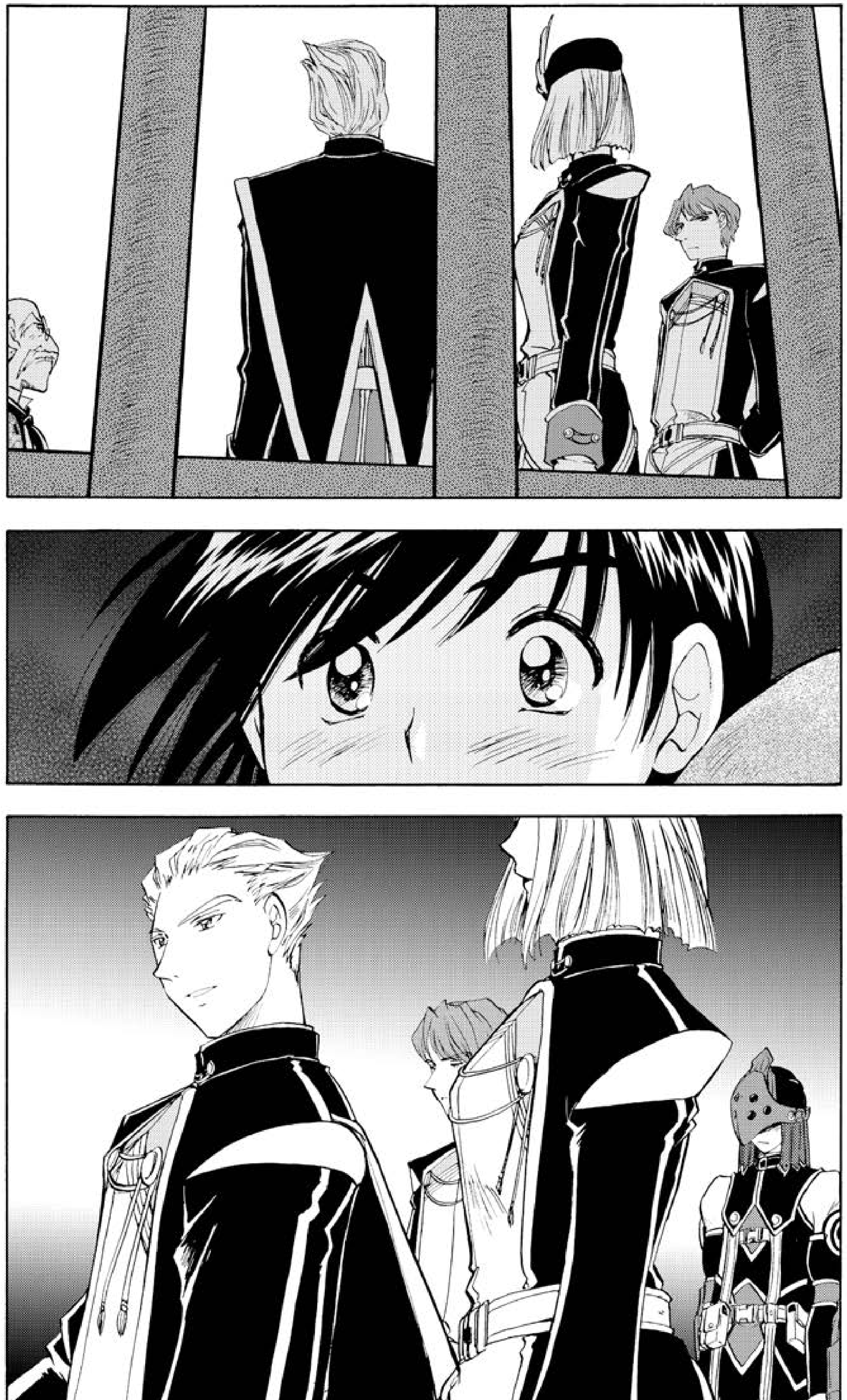

アルバート・ラッセル博士
よくぞこの《ゴスペル》の制御方法を突き止めてくださった
情報部を代表して感謝しますよ
ふん…
いたいけな老人を無理矢理働かせておきながらよく言うわい…
貴様
その黒の導力器を使って
何をしでかすつもりじゃ


軍情報部司令アラン・リシャール大佐!

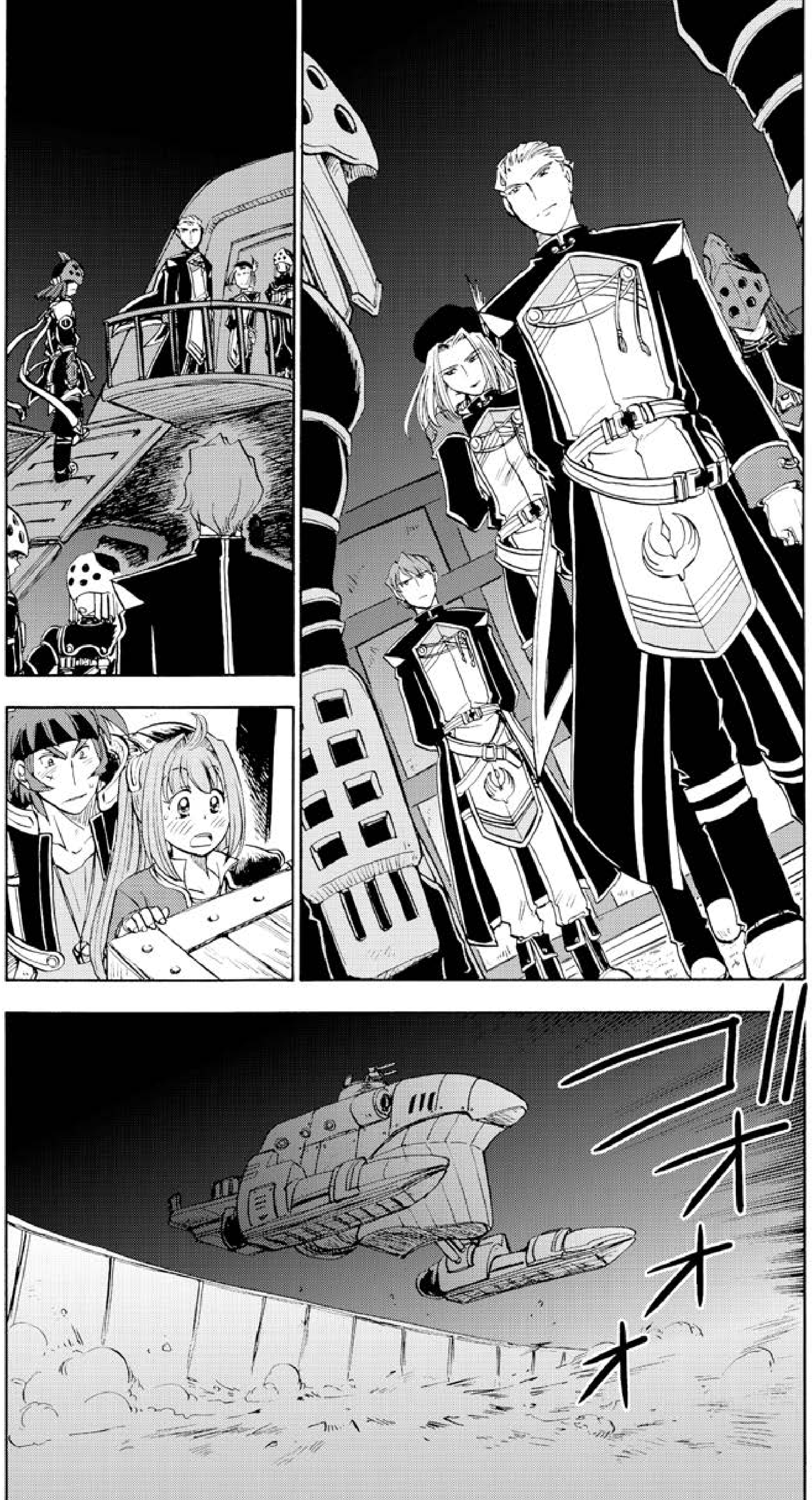



ス
タ
研究棟に明かりのついてる窓があります
そこから中の様子を伺ってみましょう
あともう少しだよ
みんな頑張って


ぐ!




では我々は
これで
失礼しますよ


ゴオオオ


ヨ…
ヨシュア!!
はっ
ご…ごめん…!
ショックなのはわかるけど
ここはしっかりしなきゃ!!
研究棟内にいるラッセル博士を保護しなくちゃね
あ……


ふあ…
?
おい?
どうかし…
ドサ


僕たちが見張ってるから早く博士を連れ出して!!
ラッセル博士!!
おじいちゃんっ!!
ばんっ
ティータ!?
おじいちゃあん
なんと……
こんなところにまで……
…さすがはカシウスの子供達じゃな
よくぞまぁあやつらの情報網をかいくぐってこれたのう


ね…ねぇラッセル博士
さっき…この部屋から軍人さんが出てきたけど
あの人達って…
そうじゃよ
あやつらが中央工房を襲いわしを誘拐した犯人じゃ!
王国軍情報部とその総司令官のリシャール大佐
で…でも…どうして?
なんであのリシャール大佐が博士をさらったりしなきゃいけなかったの?
正確に言うと彼の目的はわしではない


彼が真に欲したのは黒の導力器…
その力と制御方法じゃよ
いや…確か「福音（ゴスペル）」と呼んでおったか
ゴスペル？
おまえら何のんびりしてやがる!!
じいさんも!! くっちゃべってるヒマがあるならとっとと脱出してくれや!!
むっ
なんじゃ？このガラの悪いニワトリ頭は
にわっ
あんだとこのジジイ!!


みんな!! 急いで!!
時間がないんだ!!
あ！
そうよ！ とにかくここから出ましょ！
待て待てカペルの中枢ユニットを…
早く!!
…重剣…
アガット…
クロスナー…!?


ヴヴィーー
みんなこっちへ!!
ヴヴィーー
ヴヴィーー
どうやら侵入者が現れたようだ!

ヴヴィーー
第1・第2・第3・第4小隊は飛行船発着場及び波止場を封鎖!
第5・第6・第7小隊はそれぞれ兵舎・監視塔・研究棟を捜索!
ヴヴィーー
イエス・サー!!
ヴヴィーー
ヴヴィーー


おい
見つけたか!?


…一通り調べたが…
…監視塔も…
…この辺りは…
…いや… …まだ…
わっ!
…報告ついでに捜してみるか…
…そうだな…
…来い!


……
…ねぇ…
ヴヴィ
ヴヴィ
いちかばちか…
このまま前に進んでみない？
え？
そっちは兵士がうろうろしてるだろ
行って…大丈夫なのか？
わかんない！
はぁ？
でも…
ここでじっとしてるよりは
絶対…こっちな気がする!!


エステル!!
ん？
ヴヴィ
みんな!!
行くわよ!!
なんだ？
何か聞こえなかったか？
ヴヴィ
ヴヴィ
よかった…！こっちには兵士は来てないみたいよ
そんなはずは…
この辺りは要塞の中枢部…


バーン
ヴィ
こっちだ!!
捕まりたくはないのだろう!?
こういう時は
己の直感を信じてみるがよかろうよ
ヴィー


あそこ!!
い…勢いで入っちゃったけど…
ガチャン
あ!!
ぎょ!
パタン…


か…
鍵…
かけられちゃった…
シード少佐…
やれやれ…わしの勘もにぶったかのぅ
…今度はこの部屋に閉じ込めるつもりか？


数々の無礼失礼しました
今更…何をしても許していただけるとは思っていませんが…
どうか…
皆さんの要塞脱出を手助けさせていただきたい
……
どういうつもりじゃ守備隊長
おまえさんリシャール大佐からわしの監禁を命じられていたのではないかな？
な…
なにそれ？
そんな命令おかしいって誰も注意できなかったの？
…はい
軍の主だった将官はリシャール大佐によって懐柔されるか…
自由を奪われ身柄を拘束されています


すでに王国軍全体が
大佐率いる情報部に完全に掌握されている状態なのです
どうしてこんなことになっちまったんだよ
いくら情報部がやり手だからってたかだか軍の一部隊だろうが
百日戦役以来軍の規律は少しずつ乱れてしまったんだ
恥ずかしながら…将官クラスの間にも横領か収賄が蔓延していてね
皆…そこをリシャール大佐に付け込まれて…
で…でも…
軍人みんながそんな人達ばかりじゃないでしょ!?
親衛隊のユリアさんや…
モルガン将軍は!?
将軍なら大佐よりも階級だって上だし一発ガツンと叱ってもらえばいいじゃない！
モルガン将軍もまたハーケン門に監禁され…今は全ての権限を失っている


だが勘違いしないで欲しい
彼は決して悪事に手を染めるような人物ではない
だったらどうして
おそらくは
モルガン将軍も…
ご家族を…人質に取られているのだろう…
モルガン将軍が動けない今
リシャール大佐が王国軍の実質的なトップとなった
もはや彼を止められる人間は軍の中には存在しない
…だからといって…
大佐のしたことは許されるものではない…
それを黙認した私にも責任がある



だから…
せめてもの罪滅ぼしをさせて欲しかった
シード少佐…
…ふん
そういうことなら水に流してやらんでもない
その石頭をスパナで叩き割るくらいで勘弁してやるわい!!
きょ 恐縮です
えぇー!
冗談じゃ
さあ!
こんなところさっさとおさらばさせてくれい!
…はい!



この緊急退出口を使えば要塞裏の水路に出られる
ボートがあるからそれを使って脱出できるはずだ
ゴゴゴゴ
おお!
どうか…お気をつけて
さぁ
君達も早く
あの……
うん!
ありがとうシード少佐
さっき将軍も…とおっしゃいましたよね


もしかして
あなたも…
……
…あ…
そ……
そんな……
シード…少佐…!
エステル・ブライト
ヨシュア・ブライト
君達の名字を聞いた時からこうなることは予想していたんだ


10年前の侵略戦争で帝国軍を撃退した陰の英雄――
その子供たちなら必ずや真実を突き止めて博士を助けに来るってね
だとしたら私もこれ以上無様な姿を見せるわけにはいかないだろう?
私とて
かつては君達の父君の…
カシウス大佐直属の部下だったのだから
トントン
少佐! ベルクです!
至急報告したいことが!
びくっ
わかった!! すぐに出る!!



啄木鳥しんき の Falcom日和



英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

第3回

特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！



エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

製品情報

好評発売中

著　　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　　価：1,210円（税込）

第2話 『エリィと仔猫の内緒話』

しとしと雨が降っている。
深夜に落ちはじめた灰色の雫は、翌日の昼を過ぎても止む気配さえない。
今日は急ぎの支援要請もないので、ロイドは特務支援課の会議スペースで書類を広げていた。
そこへ、エリィがやってくる。
「おつかれさま、ロイド。紅茶をいれたわ」
「ああ、ありがとう」
置かれたふたつの白いティーカップには琥珀色が揺れ、ほのかに湯気があがっている。
エリィが隣の席に腰掛けた。パールグレイの長い髪をかきあげ、自分のぶんのティーカップを傾ける。
ついロイドは見とれてしまう。
知的な眼差しと均整の取れたスタイル。上品な美貌と、落ち着いた雰囲気……まるで美術館の絵画のように完成されていた。
特務支援課で同僚になってからしばらく経つが、いまだに彼女とふたりきりになると緊張することがある。
エリィは同い年とは思えないほど大人びて、美しい少女だった。
「これは《黒の競売会（シュヴァルツオークション）》の報告書かしら？」



「え？　あ、うん……いろいろあったから、セルゲイ課長に報告するにしても説明することが多くなっちゃってさ」
「たしかに、たくさんの事があったものね」
「思い出してみると自分でも驚くよ。変装までして乗り込んだなんて」
「ロイドのフォーマルな格好、なかなか似合ってたわよ？」
「か、からかわないでくれよ」
「うふふ……」
エリィの白い指が書類のうえで円を描く。
「ここには会場内の見取り図を入れるのかしら？　よかったら手伝うわ」
「俺は助かるけど……エリィだって忙しいんじゃないのか？」
「急ぎの用事はないから平気」
「そうなのか？　ありがとう、エリィ」
「な、仲間だもの、助け合うのは当然でしょう？　むしろ、最初から頼んでくれていいのに」
彼女は照れたように視線を手元に落とした。
エリィはクロスベル市長の孫娘であり、政界に進むために高い学識を身につけている。今は、理由（わけ）あって警察に身を置いているが。
「エリィがいてくれてよかったよ」
「あら、こんなときだけ？」
「そんな意味じゃないさ……エリィにはいつも助けてもらってる。エリィがいてくれたから、ここまでやってこれたんだ。これからもずっと一緒にいて、助けてほしい」
「え………それって……」
エリィの顔が耳まで赤くなっていった。
「書類の作成だけじゃなく、捜査のときや、魔獣との戦いのときにも、すごく助かってる。エリィのオーラレインがなかったら、なんど全滅しているか――」
「……はぁ……まったくこの人は……」
頬を染めた彼女が、がっくりと肩を落とした。
ロイドは首を傾げる。
「ん？　どうかしたのか、エリィ？」
「……どうせ、そんな話だろうと思ったわよ。はぁ……早く書類を片づけてしまいましょう」
「あ、ああ……？」
そんなことをやっていたら、玄関扉が勢いよく開かれた。
元気のいい声があがる。
「ロイドー！　ネコさーん！」
「ん？」

大声をあげながら会議スペースに走ってきたのは、幼い女の子――キーアだった。なんと、ずぶ濡れで。

衣服は肌にはりつくほど水を吸い、ライムグリーンの髪からは、ぽたぽたと雫が落ちている。

ロイドとエリィは、あわてて立ち上がった。

「キーア、どうしたんだ⁉　傘は⁉」

「風邪ひいちゃうわ！　タオルを取ってくるわね」

「みゃ～う」

キーアが鳴いた。いや、キーアの抱きかかえているものが。

駆け寄ったロイドに、ぬっと突き出されたのは――濡れてネズミみたいに細身になった仔猫だった。

「んとね、迷子なんだって」

キーアが答える。濡れた髪や衣服をエリィにタオルで拭かれながら。

「にゃおーん」

まるで会話しているかのように仔猫が鳴いた。

実際、キーアは動物の言葉が、かなり正確に理解できる不思議な力を持っている。

ロイドたちと出会った経緯も不可解だったし、名前以外の記憶を失ってもいる。なにかと謎の多い子だった。

それはともかく――

「迷子の仔猫か」

どうしたものか、とロイドは首をひねる。

耳から尻尾の先までずぶ濡れだった仔猫だが、今はエリィが用意したタオルにくるまっていた。

「みゃ～う」

さかんに仔猫が鳴きはじめる。

「なんだろう？」

「まだ寒いのかしら？」

ロイドとエリィは戸惑ってしまう。

ふんふん、とキーアが仔猫の声を聞いてうなずいた。

「んとね……お腹すいたんだって」

「ああ、なるほど。今、サモーナとタイタンしかないけど、それでいいのかな？」

ちょっと前に釣りあげた魚の名を挙げる。釣りはロイドの数少ない趣味のひとつだった。

う〜ん、とエリィが小首をかしげる。

「仔猫には大きすぎないかしら？　食いしん坊なコッペにならいいでしょうけれど」

コッペというのは、この特務支援課のビルに住みついている黒猫だ。

ロイドが釣ってきた魚をあげると喜んでくれる。

「たしかに、仔猫には大物すぎるか」

にゃ〜にゃ〜と仔猫が鳴いていると、また玄関が開いた。傘をたたみながら小柄な少女が入ってくる。

「ただいま戻りました……今、猫の鳴き声がしませんでしたか？」

帰ってきたのは、ライトブルーの髪の少女——ティオだった。

その後ろに、大柄な赤毛の青年——ランディもいる。

「よお、なに集まってんだ？」

「お帰り、ティオ、ランディ……さっき、キーアが仔猫を拾ってきたんだ。迷子らしい」

「仔猫……ですか」

「こんな雨の日に迷子になるなんざ、ついてねえな」

「お腹を空かせてるみたいなんだけど……サモーナだと大きすぎるよな？」

「温かくしたミルクがいいかと」

「ああ、なるほど」

「すぐ用意するわね」

台所に向かうエリィに、ランディが声をかける。

「その後でいいから、俺たちの飯も頼むぜ？」

「ええ、忘れてないわよ」

ロイドの袖口を、くいくいとキーアが引っぱった。

「ん？　どうしたんだ？」

「ねえ、ロイド……ネコさん飼っちゃだめ？　めーわく？」

じっとキーアが見つめてくる。

不安と期待の入り交じった表情をしていた。

「もともと、コッペも住んでるわけだし、迷惑ってことはないけど……ちゃんと世話できるか？」

「うん！」

「よし、それなら後で課長にも言っておくよ。迷子ってことなら、元の飼い主が見つかるまで預かっておいたほうがいいだろうし」

「やった〜‼」

「わたしもお手伝いします、キーア」

「ありがとー、ティオ！」
「任せてください。キーアが喜んでくれるのなら、不眠不休でもへっちゃらです」
「うーん、仔猫のためにティオが倒れないでくれよ……？」
ロイドとしては、仔猫やキーアだけでなくティオのことも心配してしまう。
やれやれ、とランディが雑誌を片手にソファーへ体を沈めた。
「まぁ、がんばれよ」
その顔をキーアがのぞきこむ。
「ランディは、ネコさんキライ？」
「べつに嫌いじゃねえさ、キー坊。でもな、俺は仔猫ちゃんのお世話をするのは、ベッドの上だけって決めてるんだ」
「ふーん、いっしょに寝てあげるんだね！」
「そうそう」
「ランディさん……最低です」
ティオにジト目で睨まれて、ランディが雑誌に視線を落として逃げた。
ふぇ……とキーアがアゴを上げる。
「……ふぇくしょん！」
「うわ!?」

顔を寄せられていたランディがのけぞった。
キーアが鼻をすする。
ロイドはハンカチを手にして膝をつくと、鼻をぬぐってやった。
「大丈夫か、キーア？」
「う、ん……ぐしゅ……」
ティオが床に落とされたタオルを拾いながら、キーアの服に触れる。
「タオルで拭いただけでは乾かないようですね。風邪をひいてしまうかもしれません。キーア、その濡れた服を着替えましょう」
「わかった！」
言うが早いか、上着をつかんでまくりあげる。
白くて細いお腹があらわになった。
「キ、キーア、まだ早いです。脱ぐのは着替えを用意してからです」
「ああ、そっかー」
「こっちに来てください。体が冷えているので、シャワーを浴びましょう」
「うん！」
ティオがキーアを連れていく。
ロイドとランディは、小さくため息をついた。

「本当に女性陣がいてくれて、助かるよ」
「まったくだ」

エリィが人肌に温めたミルクを用意してくれ、仔猫は一心不乱に舌を動かす。
前足を皿の中に入れてしまうほどの勢いだった。
ちょっと驚いた様子でエリィが見つめる。
「とってもお腹が空いてたみたいね」
「空腹のときに食べた物の味は、格別だからね」
「ロイドにも、そんな経験があるの？」
「ああ、警察学校のサバイバル訓練のときに……動けなくなるほど空腹になったんだ。ようやく食べられたときは、ごく普通の保存食が、それはもう涙が出るほど美味しく感じられたな」
「そ、それは大変だったわね」
仔猫の食事が終わる頃、シャワーを浴びて着替えたキーアとティオが戻ってきた。
「あったまってきたよー‼」

「お待たせしました」
ロイドとエリィとランディが応じる。
支援課のビルには、この五人と、セルゲイ課長と、コッペという黒猫がいて――
そして、もう一匹。
ぬっ、と姿を現した。
「…………………グルル」
それは大型の白狼だった。ティオやキーアなら背に乗れてしまいそうなほど大きい。
ツァイトという。
この土地の伝承にある神狼そっくりの、風格と威厳に満ちた狼である。その迫力は軍用犬が恐れをなしてひれ伏すほどだった。
迷子の仔猫と目が合う。
小さな双眸に映りこむ伝説の白狼。
仔猫、固まった。
ガクガクガク、と震えはじめる。
「フゥ～～～～～～～～～～～～～～～～～～⁉」
「……ガウ？」
「だ、大丈夫だからな！」

ロイドは仔猫を抱き上げた。
両腕の中に隠してやり、ツァイトが視界に入らないようにしてやる。
同時にティオが、指導に入った。彼女もキーアと同じように動物と会話ができる。
「ツァイト、小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
「ガゥ」
「そうですか、知っていますか。では、小さな仔猫がツァイトを見て怖がることも理解できますね？」
「ガオゥ、グルゥゥ」
「そうですね、街で暮らしている仔猫ですから、大きな動物を見慣れていないようです」
「……ガゥ」
「はい。そういうことなので、しばらくは、自重してください」
「グルゥ……ゥゥゥ……」
流れるような毛並みの尻尾が、へたりと垂れ落ちた。ふ〜と鼻息をもらし、ツァイトが部屋から出て行く。
大きな体が、心なしか小さく見えた。
エリィが肩をすくめる。

「かわいそうな気もするけれど……仕方ないわよね。とっても怯えちゃってたもの」
「そうだな」
ロイドも同感だった。
キーアが仔猫のことをのぞきこむ。
「だいじょうぶ？」
「ああ、もう落ち着いたみたいだ」
仔猫は空腹と緊張から解放され、満腹感もあってか、うとうとしはじめていた。
ロイドの腕に体を預け、目を閉じる。
「わ〜、赤ちゃんみたいだね！」
「たしかに、似てるかもしれないな」
「ねー？　ロイドは、結婚したら赤ちゃんほしい？」
キーアが無垢な瞳で見つめてくる。ピクッとエリィとティオが反応した。
じっと三人の視線が集まる。
当のロイドは弱り顔だ。
「子どもか……考えたこともないけど……」
「ほしくないの？　ロイドは、子どもキライ？」
「いや、子どもは好きだよ。そうだなあ……たぶん結婚したら欲しいと思うだろうな」

エリィとティオが頬を朱に染めた。
「そ、そうよね、結婚したら子どもは欲しいわよね……」
「ロイドさん、子どもが好きなんですね」
「えへへ……そっか。キーアも赤ちゃんほしいな！」
にっこりとキーアが笑みを浮かべる。
ぽん、とランディが頭をなでた。
「ほ～う、でもよ、キー坊は赤ちゃんの作り方なんて知ってんのか？」
「キーアは知らないけど……ランディは知ってるの⁉」
「当然だろ～」
「教えて！　教えて！」
「よしよし、このランディさんにまっかせなさい！　いいか、赤ちゃんってのはな、大人の男と女にしか作れないんだぞ」
「へー、大人……じゃあ、ランディとエリィならできる⁉」
「そりゃ、もちろん。たぶんな」
「ふぇ～……どうやって作るの？」
「俺とお嬢がか？　まぁ、誰でも似たようなもんだが、まずはベッドのうえで――」
ふふふふふ……と凍えるような笑みをこぼして、エリィがランディの肩をつかんだ。

「なにを話しているのかしら？」
「え？　い、いや、ちょっとばかし社会の勉強を……いや、生物のほうかな？」
「ふふふ……まだ子どものキーアちゃんに、まさか妙なこと教える気じゃないでしょうね？」
「ランディさんこそ道徳の授業が必要かと」
ティオが手厳しい。
しかし、彼は悪びれずに返す。
「いや、俺は、赤ちゃんが欲しいというキー坊の将来のためにだな――」
「まったく、ランディは……子どもに子どもの作り方を教えないでちょうだい」
「キーア、学ぶべきタイミングを間違えると、こういう悪い大人になってしまいます」
「ふぇ～？　ランディ、悪いオトナなの？」
「うっ……」
「そうよ～、悪いことしたら謝らないとね」
「はい、その通りです」
「じー」
エリィとティオとキーアに見つめられて、ランディは白旗をあげた。
「ううぅ……しーません」

「よろしい」
「反省してください」
「あはは……」
やれやれ、と見ていたロイドは肩をすくめる。
「とにかく……そろそろ、夕飯にしよう」
その提案に、みんなが賛成した。

セルゲイ課長が戻ってきてから遅めの夕飯を取って、そろそろ明日に備えて眠ろうか、という時間――
仔猫はタオルにくるまって眠っていた。
ところが、くしゅん、と小さなくしゃみをした。
「あら？　もしかして風邪をひいてしまったのかしら？」
エリィが不安そうにする。
ティオが仔猫の様子を確かめた。
「……体温は正常です。しかし、体力を消耗しているので、温かくして寝たほうがいいかと」

「なるほど」
どうしたものか、とロイドは考えこむ。
キーアが仔猫を抱きあげた。
「んじゃね、キーアがいっしょに寝る！　ロイドもいっしょに寝よ。いいでしょ？」
「え？　キーアの部屋で？」
「うん！」
「そうだな……それしかないか」
一階にはツァイトがいるし、弱っている仔猫をコッペのように屋上で寝かせるのは無理がある。キーアの部屋なら安心だろう。
ロイドが承諾すると、ティオがジト目になった。
「仔猫とキーアを独り占めですか、ロイドさん……あんまりです」
「そうよ、ずるいわ」
「エリィまで!?　じゃあ、やめておこうか？」
「ダメよ。風邪をひいたらどうするの!?」
「ど、どうしろと……」
「じゃあみんなで一緒に寝よー！」
キーアの言葉に、その場が凍りつく。

様々な思惑が錯綜しかけたが、「そんな大きなベッドはないから、無理だよ」というロイドのツッコミにより提案は却下された。
セルゲイ課長があくび混じりに言う。
「ロイド、しばらくはキーアと一緒に仔猫の面倒も見てやれ」
「あ、はい」
「キーア、いっしょにめんどう見る！」
おそらく、セルゲイ課長は〝キーアと仔猫、両方の面倒を見てやれ〟と言ったのだろうけれど。
いずれにしてもそういうことになった。

三日が過ぎて――
結局、仔猫はキーアの部屋で飼うことになった。
最初に寝かせたベッドを〝自分の寝床〟と覚えてしまったらしく、他に場所を作ってあげても、キーアの部屋の前で待つようになってしまったからだ。
仔猫の世話をするために、ロイドやティオも出入りするので、まるで共有スペースのような感じになっていた。

早朝、そんな猫部屋と化した３０４号室に顔を出すと、珍しいことに仔猫しかいなかった。
「あれ？　キーアはどこにいったんだ？」
ロイドは首を傾げる。
ふんふんふ～ん♪　と鼻唄交り（はなうたまじ）でキーアが戻ってきた。
手には《霜降りヒレ肉》を持っている。
「はい、シロカゲ！　あ～ん」
シロカゲというのは、キーアが命名した仔猫の名前だ。
みっしぃと並んで人気キャラクターである《カゲマル》にあやかったらしい。
「にゃ……にゃ……にゃぁお～～ん」
そのシロカゲが目を白黒させて後ずさる。
差し出された肉のほうが、仔猫の体よりも大きかった。
「キーア、そんな大きな肉じゃ、シロカゲは食べられないと思うぞ？」
「ツァイトは美味しいって言ってたよ？」
「う～ん、ツァイトは食べられるだろうけど……もうミルクはないのか？」
「うん。切れてるみたい」

「そうか……いつもより減るのが早くなるものな。それじゃ、今から一緒に買いに行くか」
「やったー‼」
　ロイドはキーアを連れて出かけることにした。
　手早く外出の支度をさせる。
　階段を降りた。
　ちょうど朝食の準備をしていたエリィが声をかけてくる。
「あら、お散歩なの？」
「ミルクが切れたみたいだから、キーアと買ってくるよ」
「もうすぐ朝食だけれど……後にしたら？」
「モルジュに行くだけだから、すぐ戻れると思う。朝食の後は支援要請を受けたいし」
「そうね……なら、焼きたてのパンもお願い」
「了解」
「やったー、焼きたてパン！」
　はしゃぐキーアの手を引いて、ロイドはベーカリーカフェ《モルジュ》へ向かった。
　西通り――
　支援課ビルを裏手側から出てすぐ、パラソルテーブルのならぶオープンカフェがある。煉瓦の建物からはパンを焼く香ばしい薫りがただよってきていた。

　店内に入る。
　パン職人のオスカーが笑顔を見せた。
「おう、よく来たな！」
「おはよう、寄らせてもらったよ」
　オスカーはロイドの幼馴染みで、店主のモルジュの弟子だ。最近は新聞（クロスベルタイムズ）で紹介されるほどの腕前だとか。
「おはよー、オスカー‼」
「キーアちゃんも買い物を手伝ってるのか。偉いな」
「えへへ、オスカー、ミルクちょうだい！」
「おう、アルモリカ村から入荷したばかりの新鮮ミルクがあるぞ」
　ロイドは商品棚を見る。
「えっと……焼きたてパンだと……これかな？」
「焼きたてなのは、それと、これ。今日も新作パンがあるぜ。試しに食べてみてくれよ」
「いいのか？　ありがとう、オスカー。頂かせてもらうよ」
　そこへ、エプロン姿の少女が、カウンター裏にある厨房からトレーに焼きたてのパンを乗せてやってきた。
「はい、これ、焼きあがったばかりのクロワッサン」

モルジュの娘、ベネットだ。
ちらちらとオスカーのほうを気にしている。
ベネットは彼をライバル視してパン作りに励んでいるのだけれども……その当人にはまるで意識されていないという、ちょっと不憫な子だった。
「ちょうどいいタイミングだったな。ベネットの作るパンも最高に美味いんだぜ」
晴れた空のような笑みを浮かべて賞賛するオスカーの言葉に、ベネットがそっぽを向いて顔を赤らめる。
「と、当然じゃないの……」
ロイドは苦笑しつつトレーにならんだクロワッサンを取った。
「うん、たしかに美味しそうだ。それじゃあ、これも頂こうかな」
「あ、ありがとう」
ぺこり、とベネットが頭を下げた。
ロイドがオスカーと会計をしているとき――
ねえねえ、とキーアがベネットに耳打ちする。
「あのね……」
「ん？　なあに？」
「……ロイドがね、キーアの子どもがほしいって」

「はああっ⁉」
信じられないものを見るような顔したベネットに、まじまじと見つめられた。
彼女たちの会話を聞いていなかったロイドは、理由がわからず『？』を浮かべる。
店を出るときまでずっと、ベネットが戸惑った様子だった。
「ミルクの瓶、キーアが持ちたい！」
「え？　でも、階段もあるし……結構重いぞ？」
「でも持ちたいんだもん」
「うーん、よしわかった。ミルクを運ぶのはキーアに任せるよ。ただし、両手でしっかり持つこと」
「うん！」
せっかくお手伝いをする気になっているのだから、と瓶を任せる。
ロイドは気遣いつつ、ゆっくり帰ることにした。

キーアの部屋のドアが、かすかな音をたてて開く。
廊下に人の姿はなく、部屋の中から出てくる人もいない。

もしも、誰かが見ていたなら風でも吹いたかと思っただろう。
ドアの隙間から、滑るように白色の仔猫が出てきた。
「にゃあ〜〜……」
シロカゲは無人の廊下を音もなく歩いていく。
たたた、と階段を降りた。
ソファーのならべられた応接スペース。そこで、青と白のマフマフしたものを見つけた。
「にゃおん？」
なんだろう？　とシロカゲは好奇心を発揮して、たしっ、と爪を立てた。

「……………」
ツァイトは朝のまどろみのなかにいた。
人ならざる鋭敏な感覚は、寝ていてさえ周囲の状況を把握する。むろん仔猫が近づいていることも察知していたが、どうせ気づいて逃げていくだろうと高をくくっていた。
しかし、どうやら身じろぎもしなかったせいで、ツァイトを置物かなにかと勘違いしたようだ。
だらんと床に伸ばしていた尻尾に、爪を立てられた。
なんの痛痒もない。

たとえ刃物や銃器であっても、己が傷つけられることなどないとツァイトは知っている。
あるいは、最強と名高い遊撃士——風の剣聖とやらであればわからないが。
たしっ、たしっ、と仔猫が尻尾を叩く。
毛の一本とて痛みはしないが、心地よい時間を邪魔されて、口の端が歪んだ。
重火器すら砕き散らす牙が、わずかに覗く。
どう自らの存在を知らせようか？
小さい存在に慈愛を示す白狼ではあるが、仔猫のおもちゃに甘んじるほど矜持を捨てているわけではない。
追い払う算段をしたとき、ふとティオの言葉が蘇った。
「小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
ティオやキーアが仔猫を大切にしているのは理解している。
ロイドは熱心に元の飼い主を探しているようだ。
エリィが常々仔猫の健康を気遣っているのも知っている。
そして、無関心を装いつつランディやセルゲイですら。

たとえば、今、ツァイトが立ち上がって――
爪を立てているのが巨大な狼の尻尾だったと、仔猫が気づいたら？
驚いて死ぬかもしれない。
「……ッ‼」
ツァイトは呼吸さえ止めた。
誇り高き白狼としては、仔猫殺しなどという汚名をかぶるわけにはいかなかった。
さっさと飽きてくれるのを祈るが、よほど気に入ったのか、仔猫は尻尾にじゃれついてきた。
「にゃゃぁ〜〜〜！」
さらに、爪を立てて背中へとよじ登ってくる。
「ふに！　ふに！」
好奇心と冒険心が小躍りをしているようだ。
痛くも重くもないが、むしろ転げ落ちないか心配だったし、なにより自分に気づくのではないか、と気が気ではない。
とうとう、仔猫はツァイトの三角の耳の間へと到達した。
「にゃゃぁ〜〜〜‼」
「……………………」

ツァイトは石化でもしたかのように全身の筋肉を硬直させていた。
しかし、仔猫がうかつにも足を滑らせる。
転げ落ちてきた。
鼻先に爪を立てられる。
「〜〜〜ッ⁉」
ツァイトは思わず鼻息を吹いてしまった。
仔猫が床に落ちる。
「ふぎゃ⁉」
ひっくり返った姿勢のまま見上げた。
目が合う。
お互いに固まった。
冷や汗が背筋をつたう。ツァイトは、かつてないほどドキドキしていた。
仔猫がガクガクと震えて――
ジョ〜〜〜〜〜、と絨毯のうえにアンモニア臭のするシミを広げた。
それから、おそらく仔猫にとっては全力で……ツァイトにとっては、ハラハラするほど前足と後ろ足をもつれさせながら、階段を駆け上がっていった。
「にぎゃ〜〜〜〜〜‼」

「…………フゥ」
死ななくてよかった、とツァイトはため息をこぼす。
しかし、お気に入りの寝床には、すっかり仔猫の臭いをつけられてしまった。支援課の誰かが絨毯を洗うまで使い物にならないであろうことは疑いようがない。
「グルル……」
そのとき、ロイドとキーアが支援課ビルに戻ってきた。
ツァイトの横までできて、ふたりが立ち止まる。
「ん？　なんか臭うな……？」
「ほんとだね」
「これは……まさか……」
「あ〜、ツァイトがおもらししてる〜!!」
「なんだって⁉」
「ガルゥ⁉」
キーアに指さされて、ロイドよりもツァイトのほうが驚いた。
ぶんぶん、と首を左右に振る。
「ガウッ！　ガウッ！」
「ほえ？　ああ、ちがうの？」

キーアが言葉を理解できるおかげで、えん罪は晴れたが、いたく自尊心を傷つけられたツァイトだった。





月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 173

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで ▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.173プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①『空の軌跡 the 1st』商業都市ボースで印象に残っていることは？
　アンケート②音楽レビューを読んでみたいサウンドトラックは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

応募締め切り　7月25日（金）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。